

廻る徒ら

きよと京あるま歩

東方プロジェクト
秘封倶楽部ファンブック



廻ぐるり
京きょう
徒たらり
歩あるき





鴨川河岸

かもがわかわざし

四条通を歩けば、休日の日一日くらいは邯鄲の漬してしまえる。鴨川のすぐ西、御池、三条から四条付近にかけての一带は京都でも有数の繁華街で、河原町にそびえ立つ二つのデパートには毎日たくさんの人が押し掛け、鴨川から西に木屋町、河原町、新京極、寺町……と縦に走る筋にはあらゆる商店が軒を争うように建っている。きらびやかな若者向けのファッション、小物の店たちのすぐ隣には老舗の京漬物店が藍染の暖簾を下げ、レストラン、本屋、カフェ、ゲームセンター、観光土産の店……かと思えば街中に突然ひよっこりと鳥居が据えられ、神社の門前には習わぬ経ならぬ、流行りのバラッドがアクセサリ店から漏れ聞こえてくる。蓮子とメリーも、この賑やかな一角を満喫し、その熱気を冷まそうとするかのように、四条大橋の欄干に手をかけた。

「ね、蓮子、あれ」

河岸に立ち並ぶ料亭から棚のようにせり出しているのは、納涼床だ。夏の間だけ、お客はここで涼やかな鴨川の湖面を眺めながら料理やお酒に興じることができる。今は準備中といったところ。

「そうじゃなくて、ほら……」

メリーが指差したのはその下。人々が河岸に腰かけて談笑している。夕暮れも間近に迫り、川面すぐ側はさぞ涼しいだろう。

「賀茂川等間隔の法則」

「う、と蓮子はうめく。有名な話で、この河岸に腰かけて愛を語らうカップルはなぜか一定の間隔を置いて並ぶ、という現象にいつからそう名前がついていた。

「本当にちゃんとそうなるのよねえ、何故か」

「……私、そういうのきらいだな。法則っていうんなら観測と実験と証明による再現性がないときもちわるいじゃない……パレートの法則とか、四色定理とか」

「四色定理は証明されてなかった？ それに、きもちのわるい目をしたあなたが言っても説得力がないわよ」

藍色の空に見えた一番星が、午後六時十二分〇五秒を蓮子に教える。なぜかわからないけれど、それはそうなっている。

「と、とにかく。我々はそういつた気持ち悪い謎を暴くための倶楽部なのよ。こんなしようもない謎に負けてたまるもんですか」

「蓮子、あそこに混ざるような相手、いるの？」

「……メリーこそ」

「……」

「……」

「……私たちで、混ざってみる？」

「……やめよう。悲しすぎるわ……」

とはいえ、等間隔で語らっているのはカップルだけではなく、友人や家族連れもいるのだけれど、もう二人の空気がそういう妥協を許さなかった。

「よしメリー引き返そう。飲むわよ」

「えー……」

蓮子のしようもない熱を、鴨川の流れが冷やしてくれないかしら、と、手を引かれながら、メリーは思う。



先斗町
ぼんちよう

鴨川のすぐ西、川と木屋町通りにはさまれるように、ウナギの寝床のような狭い小路が長く伸びている。道の両側には年を経た風格のある料亭や居酒屋が並んでいて、いかにも京の夕べといった風情だ。

「大丈夫？」

メリーは二つの意味で言った。ひとつは蓮子の足取りの頼りなさが不安になつて。もうひとつは、このあたりのお店は決して学生のお財布に優しくはない、という意味で。

「らーいじょーぶあ！」

マネーカードをひらひらと振る彼女に、ああ、だめだな、とメリーは悟つた。浴衣姿のカップルに擦れ違いざまに酒くさい口笛を吹き吹き、ぼんちよー、ぼんちよーと歌いながら、蓮子は上機嫌である。メリーは入り口の看板を見上げる。

「それにしても、何故あれでポントつて読むのかしら？」

「それはねー」蓮子が急に肩を抱き、耳に吐息がかかったので、ほとんどメリーは飛びあがりそうになった。「信長が京都にいたとき、このあたりにポルトガル人が集まって、ここをポントつて読んだのが始まりなんですよおー」

あれだけ酔っぱらいながら、ウンチクを語る口ぶりだけは相変わらずの立て板に水。メリーは感心するやら呆れるやら、悩んだ末に「さすが蓮子ね」と一応誉めた。うへへー、と蓮子の口元がだらしなくゆるんだ。

「それにしても、京都の地名つて変なのが多いと思わない？ 百足屋町とか、天使突抜とか。一口つて書いて『いもあらい』なんて読めるわけないじゃん！ つて感じ。そういえば壬生とか化野とか祝園だつて最初は読めなかつたわねえ。あとは御幸町通なんて今でもたまに読み方を間違ひそうになるし……」

そういえば、蓮子の言う地名たちがちゃんと頭の中で漢字と結びつくようになったのはいつごろ

だろうかと、とメリーは思う。考えれば考える程不思議だ。漢字という文字はときに音に寄り添い、ときに音を離れ純粋な意味になって、自由自在、どころか傍若無人なほどに活動する。これを息をするように使っている日本人の頭はどうなっているのか。それに、その漢字使い、地名の由来に、京都という町の歴史が圧縮されているのだ。

見やると、さっきまでウンチクを垂れ流していた相棒は、いもあらい、いもあらいと呟きながら大笑いしている。言葉の響きが変なツポに入ったらしく、眩くたびに苦しそうにお腹を抱え、目じりにはうつすら涙がにじんでいた。

「め、メリー、いもあらいだつて……うつくしくくく、い、いも……芋洗うからいもあらい……みんなで芋洗ったのかしら……」

「はいはい、これからあなたが帰るのは下鴨ね」メリーは蓮子の手を引く。あとで調べたところ、一口の地名の由来は、芋を洗ったからということではなかった。



た
だ
子
も
り
ふ
る
ほ
ん
い
ち

紵の森 古本市

京都の中心街をやや外れた北東域、下賀茂地区。蓮子やメリーの大学もここにある。すめらみことの坐しました内裏から見て良の方角であるこの地域には鎮守としていくつかの寺社が置かれていて、下賀茂神社こと賀茂御祖神社もそのひとつだ。そして、そこから南に長く伸びる、今や世界有数の原生林こそ、鎮守、紵の森である。普段は森閑とした、清涼で神聖な空気の漂うこの場所も、年に何回かおこなわれるお祭りやイベントの時は姿を変える。お盆前の時期、秘封倶楽部の二人が訪れたときも、人でごった返し、大盛況だった。

「パーパーメディア愛好家って、こんなにいるのね……」

「余剰が文化を生むのよ」

今や本を読むのに、紙に印刷された文字に縛られる必要はない。携帯端末は瞬く間に発展し、イ

ンフラの整備に引つ張られる形でごく緩やかにハラタイムシフトは進行した。それでも、紙の本をコレクションアイテムとして愛好する人口は一定数存在した。森の入り口をくぐり、参道の脇、瀬見の小川の向こうの広場。そんな愛好家たちの熱意を見せつけるかのように、所狭しとテントが並び、人々が思い思いに紙の黄ばんだ本を眺めていた。

「それに、こういった古本だと思いがけない出会いがあつたりするしね……面白いわよ」

「ページに落書きがあつたり、へそくりが挟んであつたり？」

「思いがけない本を見つけて……っていう話をしてただけどなあ」蓮子は苦笑する。「でも、確かにそういうのもあるね。それに、手垢や日光で微妙に褪せた本って、なんかこう、わくわくするじゃない。ホコリまみれの宝箱みたいで」

蓮子の目がららんと輝く。メリーにはそれがまぶしい。

「付喪神でも宿つてそんな本もあるわよね。古道具と同じで、本なんか特に持ち主の思い入れが大ききそうだし、実際あつてもおかしくないんじゃない

いかしら」

いたずらっぽく笑うメリーと、そっくりな表情で蓮子も笑う。

「そう言えば、付喪神じゃないんだけど、ここ古本市には、古本の神様がいらっしゃるわよ。人と本の縁を引きあわせたり、あるいは離したりするんだって。怒らせたら怖いわよ」

「あらこわい。……ねえ、あそこの本、背表紙に結界って書いてない？ 見に行きましようよ」

二人が歩きだそうとする、すぐ目の前を、帽子をかぶった子供がさつと横切った。彼はくるりと、蓮子とメリーを振り返り……乳歯の抜けた歯並びをあけすけにして、ニカツと笑った。そうして、あちこちの本を擦れ違いざまに撫でるようにしながら、人ごみの中へ消えていった。



びょうどういんほうおうどう
平等院鳳凰堂

宇治。京都市街を離れた南部。閑静で風光明媚なこの土地は、古くは貴族の別荘地として栄えたという。源氏物語をはじめとした物語の舞台となり、橋姫伝説などの逸話の多く残るところだ。

「とはいえ、ちよつと来るのには気合がいるわよねえ」

「交通の便的に、ここだけで一日潰れちゃうしね。着たがるのは昔と同じで、セレブと東北人とインドル人……それに、酔狂な学生くらいでしょ」

「東北人とインド人、いたのかなあ、そういう時代に」

宇治川を越え、数分歩けば平等院がある。藤棚やとりどりの植物で飾られた庭の奥、湖の中の小島に、まさに鳥が羽を休めているようにひっそりと、鳳凰堂はあった。羽を広げたような堂は河原や柱の色が褪せ、金箔に丹塗りで豪奢に飾ったで

あろう過去を哀愁とともに思わせるような、わびしさがある。

「蓮子、それって」

蓮子が携帯端末を構え、その前にかざしたのは、丸い金属の板……銅貨だった。

「これ、十円玉」

メリーに示して見せたそれには、日本国、十円と確かにあった。そしてそこに描かれているのは、まさに目の前にある建物。

「時代は、平成……けっこう昔ねえ」

「珍しいでしょ」

「っていうか、現金自体が珍しいわよね」

今や金銭のやり取りとは大部分が、カードや生体認証を経由したデータ上の取引だ。

「お金って要するに、みんなが存在するんだって思い込むだけで成り立つものだからねえ。別に物はなくともいい……逆を言えば、物がなくともみんながあるとせば、それは本当にあるのと同じなのよ」

「ものすごく詐欺くさい言い草だなあ」

「幻想……共同幻想、ってそういうものよ」

再び蓮子は携帯端末を構える。そうして、合成のシャッター音。

「……んー、やっぱりぼけちゃうなあ」

「そりゃ、二つのものにピントは合わないって」

「鳳凰堂の揃い踏み、ってやりたかったのに」

口調とは裏腹に、蓮子の表情はさっぱりとしている。池を囲う広場はぼつかりと広く、まさに鳳凰堂のためのスペースのはずなのだけれど、どこかよそよそしい、茫漠とした感じがある。

「藤原氏は、この辺りを極楽浄土にしたかったらしいわよ」

「それも共同幻想ってやつかしら……心から浄土だと思えば、これも浄土になったのかしら」

「だといいわね」

蓮子は十円玉を指ではじいてもてあそぶと、

「お賽銭っ」池に投げ込んだ。

「ああ、もつたいない」

「仏様にあげたのよ。それにそんなに貴重なものじゃないしね」

二人が立ち去った後……池の中で、蓮子の形をした影がその硬貨を受け取った。



頂ちようほうじろつかくどう法寺六角堂・八いし石

「丸竹夷に押御池、姐三六角蛸錦……」

道に親しむことは、京都に親しむことだ。通り名を数えるこの歌は、手鞠のリズムと共にずっと歌いならわされてきた。河原町御池、三条千本、といった具合に、交差点の名前や住所を道の名前で表現するのも、京の人が道を整備し、道に親しんできた証しと言える。

「というか、単純に便利なよねえ。平面グラフみたいに場所を表せるんだから」

「蓮子の目があれば別に関係ないんじゃない？」

「私は現在地しか言えないし」

北緯三十五度〇分二十七秒、東経百三十五度四十五分三十六秒、と蓮子がつぶやき、メリーが六角丸東入ル、と返す。「確かにわかりやすいわ」

二人がいるのは六角堂。目の前を通る六角通りの名前の由来にもなったお堂だ。聖徳太子が建立

したという由緒にもかかわらず、ひっそりと街に溶け込むように建っていて、今や周りを高層ビルに囲まれている。門をくぐると右手に枝垂桜、その奥に池。左手に六角堂、その前の広場にはベンチがいくつも置かれ、人々が思い思いに憩いの時間を楽しんでいる。鳩がその周りを首を揺らして歩き回り、人々が撒いた豆をついばんでいる。

「ね、これは何かしら」

メリーが指し示した石は、六角形をしていて、要石のように地に埋まっているようだった。

「へそ石ね。ここが京都のおへそなのだそうよ……エアーズロックみたいなものね」

「小さいなあエアーズロック」

「あと、実はこの石が、もともとの六角堂の礎石だったんだって。平安遷都の時に、今の六角通りを作ろうとしたのね。そのとき、この場所に建てていた六角堂が邪魔でみんな困ったんだって。すると、お堂が自分で動いて、今の場所に来たそうよ」

「お堂の方が道に……文字通り道を譲るなんて、さすが京都ねえ」

「でもそうすると、今のお堂には礎石がないのよねえ。大丈夫なのかしら、耐震対策とか」

「式年遷宮すればいいんじゃない？ 京都の寺社って何回も燃えたり戦で壊されたりしてるし、同じように何度も復活させればいいじゃない」

「まあ、ね。ちなみに式年遷宮は神社よ……」

子供が走って鳩を蹴散らす。歯とはビル群に四角く切り取られた空に飛んでゆく。

「そういえば、実は今まで言った話は全部嘘で、この石は力のある妖怪たぬきが化けたままじっとしてる、っていう話もあるわ」

「それこそ嘘くさいなあ」

「たぬきは化かすから、嘘も本当にするかもよ……」

「京都は百鬼夜行の町だしね」

「そっちの方が面白いけどね」

手鞠をついていた子供が、今度は別の歌を歌いだした。縦の通りの数え歌だ。

「寺御幸魅屋富柳堺……」



愛宕念佛寺

京都には風葬の地が三か所ある。洛中の南東部、清水寺周辺の鳥辺野。京都の中心よりやや北西、金閣寺、舟岡山周辺の蓮台野。そして遥か西の果て、嵯峨野の山裾、化野だ。たびたび京都を襲った戦乱や流行り病によって山と積み上げられた無縁仏のなきがらたちは、この地に集められて弔われた。

化野には二つの念仏寺がある。化野念佛寺と愛宕念仏寺……いずれも、無縁仏たちを念仏を唱えて弔ったのだ。

「ねえ、愛宕っていう漢字、普通は『あたご』って読むじゃない？　なんでここでは『おたぎ』になるのかしら？」

「よくわからないけど、野坂さんを『のさかさん』って呼んでも『のざかさん』って呼んでも別にどっちでもいい、っていうのと同じようなものなんじゃないかしら」

「そうそう、それって私にはちよつと不思議なのよね。マエリペリーがマエリペリーになったら変じゃない？」

「うーん、どう言ったものやら」

談笑しながら門をくぐり、階段を上ると、いっぱい石像たちが二人を迎える。

千二百体羅漢像。平安の頃にはすであつた古寺にもかかわらず、この寺は何度も廃寺の危機を迎え、昭和の時代になつてある住職の手によつてようやく復興を見たという。そのときにこの寺の長い隆盛を祈願し、一般の人の手彫りによる羅漢像で敷地内をいっぱいにしたのだ。

「かわいい」

とメリーが言う。およそ仏像にかける言葉ではなさそうだけれど、この羅漢たちは確かに、愛嬌に満ち溢れ、滑稽さすらあつた。彫つた人々がその姿にそれぞれの祈りを込めたように、それぞれが個性的な姿をしている……逆立ちをしたもの、サッカーボールを蹴っているもの、杯を酌み交わす夫婦羅漢、竹刀を持った剣道羅漢、埴輪のような顔をした面白顔の羅漢……

しかし、そのどれもが、笑みを浮かべている。「いいよねえこういうの。信仰って、こんな感じでカジュアルにすればいいのよ」

「まあ、壺を買ったり怪しげな歌を歌ったりするようなのがどうしても目立つちゃうわよね」

「あ、見て、あの仏像、触つて良いんだって。触りに行きましょう」

「……蓮子の場合、それは信仰じゃなくて好奇心とか興味本位とかがつていうんだと思うけどね……」

ふれ愛観音堂と書かれたお堂には、金属のすべすべした観音様が坐していた。蓮子とメリーにあちこちらと撫でられながら、観音様は終始にこやかに、二人のなすがままになつていた。

誰かが鐘を撞いて、音がさざ波のように山に響いた。千二百体の羅漢たちは、じつとそれに聞き入つていた。

あとがき

ドーモ、つくしです。コミコミで何を書くか考えて、ふと京都を歩いて撮りためた写真が目に入ったのでこんな本になりました。秘封倶楽部が京都でダラダラするだけの内容でしたがダラダラ読んで頂けたなら幸い。秘封クラスタ諸賢におかれましては今年またもや東西二回も開催される秘封オンリーでお会いしましょう。

ちなみに下の写真は京都の高級料亭「なか卯」さんの牛丼風京懐石です。
とつぴんばらりのぶう。

おくづけ

著作・撮影・その他 春日野土筆

表紙挿絵 柘タイガー

印刷 近くのセブンイレブン

平成二十四年三月三日

コミックコミュニケーション16にて





http://www7b.biglobe.ne.jp/~tsukushi_k/

